



TITLE:

<批評・紹介> 竹内義雄著「諸子概説」

AUTHOR(S):

藤田, 至善

CITATION:

藤田, 至善. <批評・紹介> 竹内義雄著「諸子概説」. 東洋史研究 1936, 1(5): 469-473

ISSUE DATE:

1936-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138701>

RIGHT:

諸子概説

武内義雄著

支那學入門叢書。弘文社書房發行。昭和十年十二月發行。菊版二五一頁。定價壹圓五拾錢。

武内博士は我等の誇るべき大先輩であり、本書は先生の長日月に渉りたる御研鑽の集大成である。今本書を手にして我等感激殊に深きものあるを覚へるのである。然し私は以下敢て一個の書生として、自由なそして平靜な氣持で本書を世に紹介したい。先輩に對し失禮の段は平に御諒解を願上げ度い。

書物を紹介するに（一）横の關係を考へ、本書が他の類似の書物に對して如何なる特色を有するか。（二）縦の關係に於て本書は、本書と過去に於て發表された同一著者の研究との間に如何なる地位關係にあるか。この二點を明瞭にすることによつて、所謂縱横無盡の批評をすべきであるが、私の淺學なる未だ（一）の點では充分でないのである。

著者はまづ敍説に於て諸子を定義し、専ら漢書藝文志により、儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家、縱横

家、農家、雜家の九流を以つてこれに當て、隋書經籍志・四庫全書總目提要の分類法を排してゐる。而してこの九流の中で特に儒家と道家との對立せる二大學派を捕へ、これを重要視してゐるのである。

以上は大體今日迄普通の考へ方である。然るに本書の特色はこの儒、道の二大學派を以て他の諸子と對立した關係におかずして、他の諸學派はこの二大學派の開展によつて自然に又當然に現れ出でたる分派に過ぎずと強調してゐる點に於て著者の見識が最もよく發揮されてゐる。即ち陰陽家、墨家、名家を以て何れも儒家の支裔とし、法家、縱橫家、農家を以て道家の主張とし、要するに九流はこの二大思潮の下に胚胎したものであり、この二大思潮の下に包括せしむべきものとの明快なる論斷を下し、且つこの二大思潮自身に於てそれ／＼一貫した思想の流れを辿つてゐる點に私は著者の識見に敬服する次第である。

以下第一章より第九章迄、九流諸子を分ち論じてゐるが、その各章に於て著者のこの識見が極めて巧みに叙述されてゐるのであつて、これがため本書全體が一つの有機的な組織ある體系をなしてをり、諸子の思想は單に個

々別々に孤立してあるのではなくして、全體との関連の下に亂れぬ一線をなしたる思想の流れが鮮かに理解出来るのである。

例へば、儒家と墨家との關係を説明して、「墨子は孔子の後學について儒者の道を學んだが遂に周禮の煩擾にして時世に合せないことをさと、質朴簡約な夏禮によつて世を救はんとしたものだと考へられる。」又名家を説明して、「論理學派の崛起は近い原因を求めると辯論の争によるもので、私はこれを主として儒墨の論争に起源するものと考へる。」と言ひ、陰陽家をも加へて儒家の思想の變轉發達の跡を辿つてゐる。而してこれが最後に雜家に移行行くことを注意してゐる。

又儒家に於ては、その始祖孔子によつて考へられた人間最高の道德である「仁」は、次にその弟子曾子によつて「孝」に變じてゐるとし、「仁」とはこの孝を仁と見たのみだ。」と言つてゐる。次に子思に於ては中庸の道が考へられてゐるが、これは「孔子の仁、曾子の孝と何等擇ぶ所なく、只その名稱を異にしてゐるのみである。」としてゐるのであつて、こゝに亂れざる思想開展の一線が鮮かに説明され、思想の流れがこゝに明瞭に理解出来る譯で

ある。これらの點に本書の持つ盡きぬ妙味があるのである。

然らば著者のこの見識は何によつて得られたかと言ふに、私はこれ全く著者に歴史家的精神が溢れてゐるからであると思ふ。即ち著者は諸子の思想を考へる場合に、單にその個人の思想だけを取り出して論じ様としてゐるのではなくして、その前に必ず諸子の傳記について詳細精密なる注意が拂はれてゐる。即ち諸子の生國、生卒年代、事蹟、師弟關係等が著者には大なる關心事であり、従つてこのことより現存の諸子のテキストについても深刻卓拔なる分析考證が行はれてゐるのであつて、著者の主目的はこれによつて思想の前後系統を把握し、一貫した流れのもとに思想推移の跡を辿ることにあるのである。今日迄この方面の研究が比較的閑却されてゐた傾があつたが、著者は本書に於てこの點に斷然一家の見識を遺憾なく發揮してゐる。然し本書に於ては斯る煩雜なる考證が實際に一々記載されてゐるのではなく、著者の長年にわたり絶ゆることない眞摯なる努力考證の結果のみが集成され適切に利用されてゐるのである。

卷末に六國年表訂誤が附録されてゐるのは著者の微意が那邊にあるか極めて明瞭である。

故に思想の淵源に關する從來の學說、即ち漢書藝文志にある九流出王官の說に對しても深き洞察と理解とが加へられ、これに對して章炳麟、胡適の兩說が對立してゐたのであるが、著者は「實際九流は時を同じくして起つた學說でなく、各々時代の推移につれて現れた學說」との論斷を下してゐる。こゝに思想と思想家とに對する歴史的研究と省察とがなさるべくして本書にはこれが完全になされてゐるのであつて、この點に本書を以て思想史としての立場より高き評價を置く所以である。

この最もよい例として老子について一言すると、老子は史上の人物として、種々な傳説と疑惑の雲に包まれてゐたのであるが、著者の嚴正なる歴史家の考證によつてこの點大いに究明された。著者は今日迄老子考（藝文八ノ九）、河上公老子唐本考（藝文十ノ四）、老子原始（大正十五年）、老子の研究（昭和二年）、老子と莊子（昭和五年）に於て老子の事蹟、テキストに對して眞に驚嘆すべき前人未踏の批判考察を行ひ、これによつて得られた結果を本書に於て充分に利用して卓拔なる論斷を下してゐるの

である。即ち「私の考では老子は孔子よりも約百年後に宋に居た隱君子で道德經上下篇は後の學者が老子の言として傳へられたものを集めたものだと思ふ。」と言つてゐるのは全くこれである。

こゝに老子の生國と生年とそしてテキストとを綿密に考證して、從來の老子に對する諸傳説を排してゐる。老子の生國である宋は殷の後であり、従つて周の文化の影響を受けることも少く、且つ當時周圍の國々より輕蔑を受け、長くこの侮りを忍んで來たのであるが、この宋の國狀が遂に老子をして卑弱謙下を處世の要訣と説く道家の道德説を生むに至つたものとして、時と處とを深く考察することによつて思想發生の緣由を考へてゐる。そしてこれを魯國が生んだ儒家が周禮の復興を叫んだのと好箇の對照をなしてゐるのである。

次に道家に於て思想の系統として老子―關尹・列子―楊朱―環淵・田駢―莊子の順に説明して思想開展の跡を辿つてゐるが、これ何れも眞に嚴正な歴史家的態度を持して精密な考證を行ひ、これが生存年代を確定し、年代順に斯く配列することによつて思想發展の脈絡を考へたのであつて、この點に大いに注目すべきものがある。

以上本書の特色は、

(一) 九流の思想を儒家と道家との二大學派に包括し、儒家に於ても、道家に於ても常に一貫した思想の流れが力強く一線を描きて叙述されてをり、且又道家と儒家とを相對立した思想と考へながらこの兩者を相關連して叙述したこと。

(二) 常に歴史家的態度を持して思想發生の淵源とその繼承發達とを年代的に正確に考證して、思想そのものと思想家の傳記とを相關連して考察説明したため、思想變遷の過程が一層明瞭になつたこと。

この二點にあると思ふ。

行文平易にして流れるが如く、論斷概ね穩健にして人を肯かす、著者の態度又極めて眞摯にして些かの銜氣なく、透徹せる理智と謙遜なる情趣とは實に掬すべきものがある。汲めども盡きぬ諸子の思想と著者の思索とが氣持よく本書によつて調和されてゐるのである。

尙最後に一言著者並びに讀者に深く御詫びせねばならぬことは、六國表訂誤そのものについて何等の批判を加

へてをらぬことである。本書に於て、著者の情熱が最も強くこれに注がれてゐるのであるが、今の私としてこの訂誤の是非を云々する充分な用意がないのである。故にこれに對する批判はこれを後の機會に譲り度いのであつて、今ここでは六國表訂誤を附録とした著者の眞意を紹介するに止めるのである。

(藤田至善)